

地域と共に留学生を受け入れる

—地方私大におけるオープンキャンパス・プログラムの試み—

Cooperating with the Local Community to Accept

International Students: A Case Study of an Open

Campus at a Provincial Private University

武蔵野美術大学 三代 純平

MIYO Jumpei

(Musashino Art University)

キーワード：参加、アーティキュレーション、留学生支援

地方私大の課題

本稿では、地方私大における留学生受け入れの試みとして、オープンキャンパスを通じたアーティキュレーションの構築について紹介する¹。大学の教職員、留学生、地域の方々と共に、オープンキャンパス・プログラムを企画、実施し、韓国の高校生を受け入れることで、そこに、ことばと文化を学びあう場が生まれ、結果、留学生受け入れの促進と受け入れ体制の充実につながった。本稿では、このオープンキャンパス・プログラムを取り上げ、地方私大、地域、留学生それぞれにとってメリットのある留学生受け入れのあり方を議論したい。

オープンキャンパス・プログラムとは、後述するが、韓国の高校生を対象にした短期研修とオープンキャンパスを統合したプログラムである。本プログラムは、山口県東部にある私立、徳山大学において実践された。2011年夏より開始され、2013年夏まで私はその運営に携わった。東日本大震災の影響による留学生の激減から、留学生受け入れ促進を目的に始められたプログラムであったが、実際に運営に携わると、教育的効果を含め、さまざまなメリットがあることが見えてきた。特に、多くの地方大学が同様の課題を抱えていると思われるが、次のような課題を解決する契機をプログラムに見出

¹ 本稿は、三代（2015）をもとに書かれている。プログラムの詳細は、そちらを参照のこと。

すことができた。

- 留学生の急増による、地域住民との摩擦
- 大学関係者による留学生の無理解
- 日本語教育担当教員と他の教職員とのコミュニケーション不足

以上の課題解決も視野に入れ、地域が連携し、取り組むことで、オープンキャンパス・プログラムは、地域全体で学び、地域全体で留学生を受け入れ、育てるための仕掛けとなっていった。

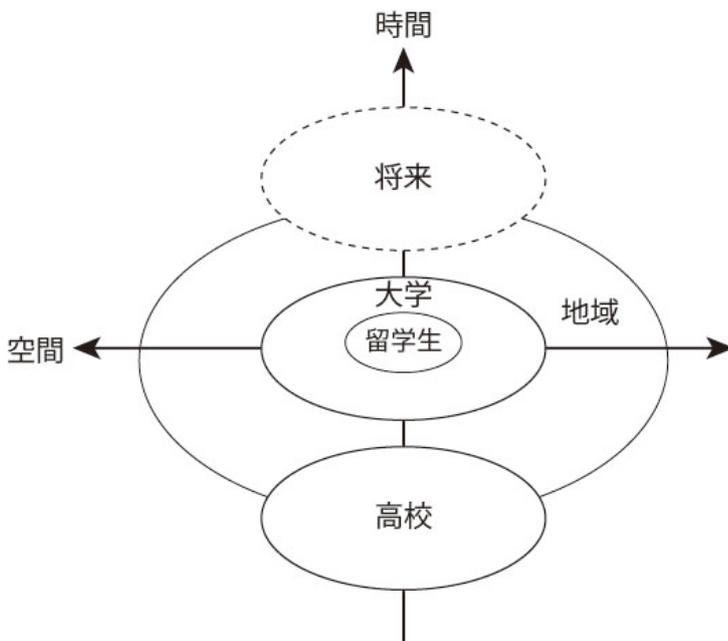
オープンキャンパス・プログラムとは

「オープンキャンパス・プログラム」は、通常のオープンキャンパスに参加できない韓国在住の高校生を対象に特別に企画されたプログラムであり、韓国の提携校の日本留学を希望する生徒、日本に関心のある生徒を対象に行われた。韓国の高校生に徳山大学を見学してもらい、関心をもたせることを目的としていたが、提携校の意向から、文化体験学習の短期研修プログラムとしてデザインされた。実際にこのプログラムを運営してみると、教員・職員・学生・地域が連携することで、参加した高校生にとどまらず、徳山大学の留学生、さらには教職員にとっても大きな学びとなる可能性があると感じられた。また、プログラムを通じて、地域と連携した留学生受入れの可能性も見えてきた。

このプログラムの意義について「参加」と「アーティキュレーション」(連続性)という概念から捉えてみたい。ことばの学びをコミュニティへの参加から捉える議論がある(三代、2009)。ことばは、コミュニティに内在し、留学生はそのコミュニティに参加し、その一員になることを通じてことばを体得していく。またコミュニティ自体も、留学生のことばを受け入れていく。まさにコミュニティが自らの内に流れることば、あるいはコミュニケーションを充実させていくのである。近年、このような立場から、留学生のコミュニティ参加の支援が、新しい日本語教育のあり方として積極的に議論されている。私自身もこのような立場に立ち、本プログラムの意義を二つの軸の参加から捉えている。一つは、地域への参加であり、もう一つは、進路としての新しいコミュニティへの参加である。プログラムを地域と連携して運営することで、参加した高校生は、地域参加の機会を得る。同時に、運営をサポートする徳山大学の留学生も地域とつながりを持つことになる。本プログラムを通じて、高校生は、徳山大学、徳山という地域、そこで生きる人々とつながりを持ち、進路として徳山大学を選択する。さらに、大学、地域の支援を受け、日本での就職を決めていく。この二つの参加は図1のように示すことができる。さらにこの二つの軸による参加は、新しいアーティキュレーションとして位置づけることが可能である。従来のアーティキュレーションは、高校と大学の日本語学習のつながりとして議論されることが多かったが、日本語学習のつながりではなく、人のつながりからのアーティキュレーションとして本プログラムは捉えられる。高校生の内から、大学と地域を見学し、人とふれあう

ことで進学を決める留学生と受け入れ側双方に信頼関係を築くことができるのである。

プログラムの内容や期間は、提携校のニーズ等によって異なる。短い時は、3泊4日で行われ、長い時は、日本語研修や工場見学なども行い、2週間に及んだ。本稿では、過去4回の実践に基づき企画された5回目のプログラムであった2013年度夏期のオープンキャンパス・プログラムを紹介する。同プログラムには、韓国の2つの高校より高校生22名が参加した。なお、プログラムに参加した高校生は必ずしも日本への留学を考えている生徒ばかりではなく、短期研修的な目的で参加している生徒もおり、日本語をほとんど勉強したことがない生徒も多く含まれていた。



【図1 時間と空間から考える留学生のコミュニティ参加】

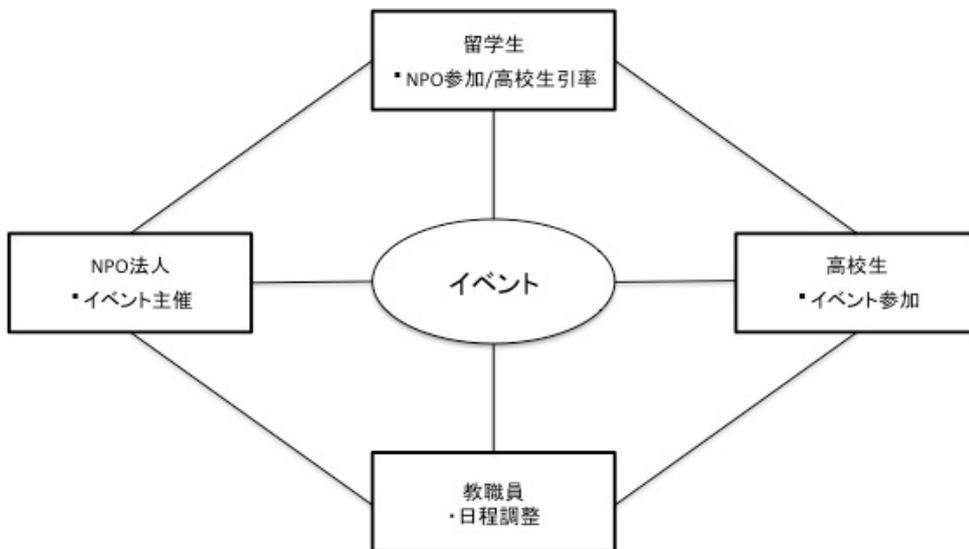
オープンキャンパス・プログラムの概要

【表1 2013年度夏期オープンキャンパス・プログラム】

日程	内容
1日目	地域のイベント見学
2日目	歓迎会／ホームステイ
3日目	ホームステイ
4日目	体験授業（経営学・心理学）／キャンパス・ツアー／入試説明会

2013年度夏期のオープンキャンパス・プログラムは、表1の日程で行われた。本稿では、主な活動として「地域のイベント見学」「歓迎会」「ホームステイ」「体験授業」を取り上げて紹介したい。

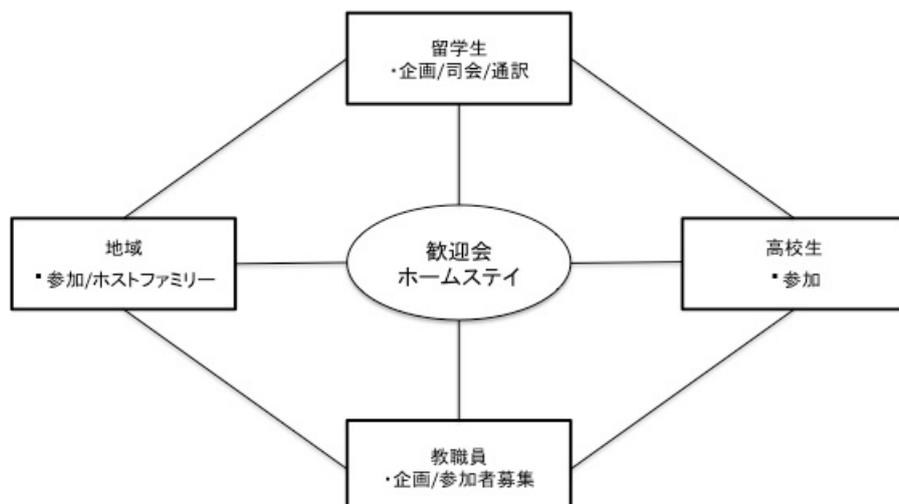
■1日目 地域のイベント見学



【図2 地域のイベント見学における関係図】

1日目は、地域のイベント見学であった。このイベントへの参加者、役割などは図2の通りである。夕方に徳山大学に到着した高校生たちは、地元のNPO法人「ライトアップ周南」が主催する町興しのイベントに「周南マルーチェ」に参加した。徳山大学のある周南市は工場夜景を観光資源としていたが、港で夜景を見ながら飲食が楽しめるイベントが開催された。オープンキャンパス・プログラムは、そのイベントにあわせて日程を調整された。イベントを主催するNPO法人「ライトアップ周南」は、地域の日本青年会議所のメンバーを中心に運営されている地域活性化を目的とした団体で、さまざまなイベントを企画し、周南市を盛り上げている。このNPO法人の存在は、徳山大学の留学生の地域参加を強く支えていた。地域活性化のために留学生にも参加してほしいという「ライトアップ周南」の意向により、徳山大学の留学生もイベントの運営スタッフとして加わり、それぞれの国や地域の料理を活かした屋台を出店することになっていた。地域に根差して活躍している留学生の姿をぜひ高校生に見てほしいという願いが私にはあった。そうすることで、地域として留学生を受け入れていることや、地域の一員として留学生が活躍できることを知ってほしいと考えた。そこに地方の小規模大学に留学する意味があるとさえ考えていた。なぜなら、地方の小規模大学だからこそ地域と密着した教育を構想しやすいため、都市部の総合大学とは異なる小規模大学で学ぶ意義があると私は感じていた。オープンキャンパスが大学での学びを体験するための場所であるならば、地域と密着した活動を体験することには、もう一つの体験授業のような意味合いがあると言える。また、地域のイベントに海外からツアー客のように韓国の高校生が来ることは、イベントの活性化にもつながり、地域においても韓国や留学生に対して親しみを覚えてもらうことが期待できた。

■2-3日目 歓迎会・ホームステイ



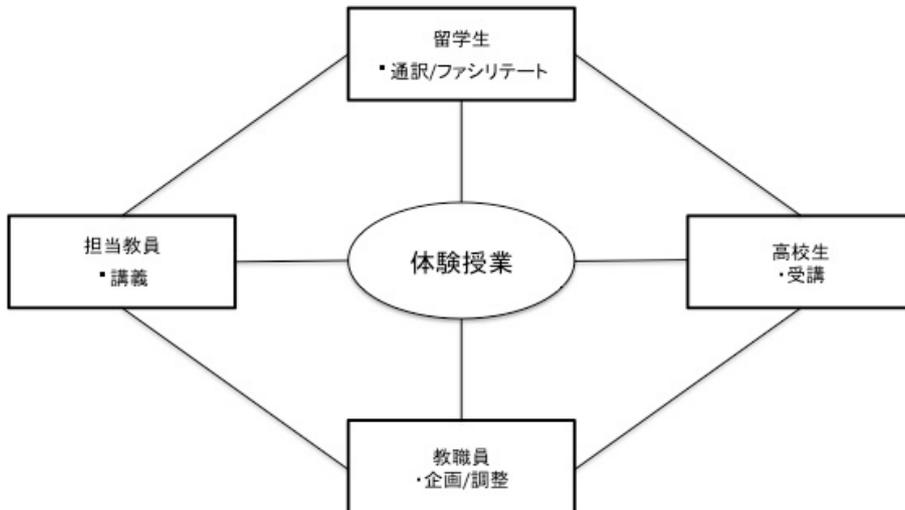
【図3 歓迎会・ホームステイにおける関係図】

2日目は、歓迎会とホームステイである。主な参加者は、図3の通りである。歓迎会には、高校生、留学生、大学の教職員、国際交流に関心のある日本人学生、さらに地域からホストファミリー、日韓友好協会の方々が参加した。歓迎会も、プログラムを重ねるたびに徐々に改善されてきた。当初は、高校生、一部の韓国人留学生、徳山大学の教職員、ホストファミリーが主な参加者であった。日本語が堪能な特定の留学生が通訳と司会を担当し、歓迎会を進行していた。しかし、回を重ねるたびに参加する留学生や教職員の数も増え、歓迎会にも教育の機会を見出すようになった。2013年度のプログラムでは、留学生支援室の大学職員の発案により、徳山大学1年の留学生によって企画されたアイスブレーキングのゲームがプログラムに加わった。1年生から協働で企画する経験を積むことでリーダーシップのある学生に成長してほしいという職員の提案であった。その1年生の多くは、前年度のオープンキャンパス・プログラムに高校生として参加した経験をもつ学生であった。さらに、韓国以外の留学生や日本人学生も参加するようになり、徳山大学の学生同士にとっても交流の場へと発展した。

食事の際は、ホストファミリーとそのファミリーに受け入れてもらう高校生を中心に、韓国人留学生、その他の留学生、日本人学生、教職員がバランスよく混ざるグループに分かれての歓談とした。その際、徳山大学の韓国人留学生が通訳を担当したが、拙いながらも通訳の経験は、彼ら／彼女らにとって非常に勉強にもなり、自信にもなる。この通訳をきっかけに、ホストファミリーと高校生が翌日観光に出かけるときも通訳として同行し、ホストファミリーとのつながりが留学生にも生まれた。

歓迎会が終わると、高校生は各ホストファミリーとともにホームステイに出かける。ホームステイは、プログラムに参加した高校生対象に行っているアンケート調査で毎回もっとも評価が高い。高校生にとって地域の生活を体験するよい機会である。さらに、高校生が後日、徳山大学に留学する場合も、ホストファミリーがいることで地域への適応がスムーズになるというケースも見られた。

■4日目 体験授業



【図4 体験授業における関係図】

4日目は、体験授業である。図4で示したように、体験授業は担当教員とプログラムを運営する教職員、留学生との協働で企画・実施された。体験授業の科目は、高校側のニーズと徳山大学の学科にあわせて決定していた。2013年度夏期は、経営学と心理学の体験授業を行った。体験授業はグループワークを取り入れ、各学科・各コースの留学生が講師の通訳とグループワークのファシリテートを行うようにした。通訳やファシリテーターとして活躍する留学生の姿を見て、高校生やその引率の教員は、大学の教育を信頼してくれた。特に、引率の教員が体験授業を通じて留学生を非常に高く評価してくれたことが印象的であった。通訳やファシリテートをする留学生をしきりに褒め、授業の後に留学生に徳山大学での生活等を詳しく聞いていた。

加えて、体験授業を担当した教員と留学生は打ち合わせをしたり、体験授業で使用した資料の翻訳をしたりしたが、この経験が留学生側にとっても勉強になっていた。教員側も留学生とコミュニケーションをとるよい機会になったようで、留学生を再評価する声が聞かれた。さらに、体験授業を依頼する過程で留学生担当の教職員と専門課程の教員との間にコミュニケーションが生まれた。私自身、普段留学生が学んでいる経営学や心理学の教員の授業を観るよい機会であった。興味深かったのは、体験授業を担当した教員も、通訳を介さなければことばが通じない高校生を相手にどのようにすれば関心を惹けるのかを試行錯誤し、徐々に体験授業の形が洗練されてきたことである。それ自体は当然のことかもしれないが、留学生が増加した大学の授業を担当する教員にとっても意味のある経験であると思われた。

地域で学ぶ／地域が学ぶ

以上、徳山大学で行われたオープンキャンパス・プログラムの一事例を紹介した。事例から、高校、

大学、地域が連携し、コミュニケーションをとることで、地方私大が留学生受け入れで抱える課題を解決する糸口になることを示した。オープンキャンパス・プログラムのポイントは、以下の2点である。

●地域全体での留学生受け入れ体制の構築

●教育プログラムとしてデザイン

オープンキャンパス・プログラムは、イベントへの参加、歓迎会、ホームステイなどを通じて、大学と地域が連携し、地域で留学生を受け入れる土壌を作ることに一役買っていた。少子化の加速する中、地方都市、地方私大の抱える困難はますます大きくなることが予想される。留学生の受け入れ促進が、地域の問題ではなく、地域の希望となるような受け入れ体制の構築が望まれる。地域で留学生を受け入れることで、地域で留学生を育てる環境ができる。2011年度のオープンキャンパス・プログラムに参加し、2012年度から徳山大学に留学した学生は、2013年度には徳山大学の学生として本プログラムをサポートし、NPO法人「ライトアップ周南」の方々のサポートを受け、2016年度より日本国内の企業に就職している。このようなモデルを基に、留学生受け入れから地域の中小企業で活躍する元留学生が現れる道筋までを産学官が連携して構築していくことが今後の課題であろう。

オープンキャンパス・プログラムは、学生募集を目的の一つとしながらも、同時に教育プログラムとしてデザインされている。それは、高校生にとっては、ホームステイをはじめとした文化体験プログラムであり、留学生にとっては、地域の方々や大学の教職員と協働でプログラムを運営する経験を通じた社会人基礎力の育成プログラムであったと言える。さらに、地域の方々にとっても国際交流を経験する場となっており、大学の教職員にとっては、普段の業務とは違う形で連携することでFDのような役割を担っていた。このようにそれぞれ立場の異なるものたちが学びあうことができるプログラムを意識することで、単なるオープンキャンパスにとどまらず、地域の多文化共生社会の実現へ向けた教育プログラムにデザインすることができる。結果、よりよい留学生受け入れの土壌が地域に生まれ、留学生受け入れの促進にもつながった。留学生は、教室の中だけで学ぶのではない。むしろ、地域で学ぶことの方がはるかに大きく、そのような学びの場を構築することが私たち日本語教師の新しい役割であると言える。そして、留学生が地域で学ぶだけでなく、受け入れを通じて大学を含めた地域全体が学ぶことが、よりよい留学生受け入れ体制には必須となるであろう。

参考文献

- [1] 三代純平 (2009). コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から—『早稲田日本語教育学』6, pp. 1-14

[2] 三代純平 (2015). 日本語教育という場をデザインする—教師の役割としての実践の共有『言語文化教育研究』13, pp. 27-49

謝辞：本実践を3年にわたり、共に企画・実践してきた徳山大学留学生支援センター・高口誠二郎さんに心より御礼申し上げます。すでに勤務校を移った私が本稿を執筆することを快く承諾、後押ししてくださいました。